

科研費計画調書の書き方指南

三 町 勝 久

依頼により、上のタイトルで文章を書くことになった。内容が内容だけに、何処まで何を言うべきか、ちょっとあそこは文章にしにくいな等と悩ましいところが多々あるので、その辺の筆者の気持ちを汲み取って以下の文章を読んでもらえると有り難い。また、基盤研究（一般）を念頭において書いてあるが、奨励研究等もそれに準じていることは言うまでもない。

1. 採択されない為のテクニック

極めて初等的な部分から始めたい。全国的に見て、この初等的な部分すらクリアしていない調書がまだまだ沢山あると思われるからである。端的に言って、未だに科研費が採択されたことが無いと言うような人は、まず間違いなく此のレベルと置いて良いだろう。

問題を顕在化するために、絶対に採択されない方法にどんなものがあるか考えてみる。すぐに思いつくことは、いい加減に書くことである。そう聞いて、「なーんだ」と笑ってしまった人はかなり危ない人である。経験的にそう言える。ここで笑った人は何をするのが「いい加減」な事かを全く理解していないが故に笑ったのだと推察されるからである。では、何が「いい加減」な書き方なのだろうか、具体的に典型例を示してみよう。

(1) 枠を埋めない

我々は、大きく分けて研究課題、経費欄、組織欄、目的欄、計画・方法欄の枠を埋めることが実際の作業となる。研究課題、経費欄、組織欄を埋めない人はいないだろうが、目的欄、計画・方法欄の枠がしっかり埋まっていない人は沢山いる。ここで、埋めると言っている意味は、余白を残さないということである。基盤A、Bでは2ページ、基盤Cでは1ページの枠が目的欄、計画・方法欄それぞれに当てられているが、これだけの枠があるにも関わらず、文章は2～3行か、せいぜいが10行といったものがよくある。此の程度だと、余白の方が大きい。なにも科研費の書類に限った話では無いが、事務書類などの升目は字数が指定されていなければ黙っていても8割位は埋めなさいというのが一般常識になっている。それを逸脱する物は書類として不備であるということらしい。とすると、上述の様なケースは内容以前に書類不備として落第である。

(2) お金は要らないと書く

正面切って、お金は要らないと書く人もそうは居ないだろうが、良く読むとそれと同義語を書いてしまっている書類は驚くほど多い。どこに書かれているかという、計画・方法欄である。どう研究を進めていくかを書こうとして、「当教室には

(または周辺の大学には), 本研究を推進するのに強力な研究者が十分にそろっているのに、セミナー等を頻繁に行う」などと書いてしまうのである。これだったら、「じゃあ、お金は要らないじゃない。勝手にやって下さい。ハイ、落第」ってなことになる。

(3) 具体性を欠いた文章にする

何をどう研究するかを述べる場合、「××を一生懸命研究する」とか「××を詳しく研究する」、「××を詳しく調べる」等といったような書き方は誰でも書ける。特に「××」があまりにも大きっぱな場合、情報量はゼロである。例えば「XX多様体の研究」や「YY方程式の研究」だと、余りにも漠然としていている。これなら、あなたが本当に書いたのですかと問われても文句は言えない。

(4) 不自然な計画を立てる

組織欄の分担者のリストを見ると、教室員全員が分担者になっていたりとか、そうでなくとも、当該研究課題において、どう考えても不必要な者が混じっているような書類は拙い。当該研究に不必要な者が混じっている場合、申請金額の底上げに使っているだけ(とするならば、これは立派な不正行為です)と見なされるか、そもそも研究計画の立案が不相当と思われるでも仕方が無い。

(5) 汚い字、読めない字で書く

手書きの汚い字や、乱暴な字はもとより、あまりにも細かい字でぎっしり詰まった書類を読むほどまで、審査員は時間も無ければ、気力も無いものである。申請書類は読んでいただくものであって、書いてやるものでは決してないことを肝に銘ずるべきである。手書きか、ワープロかという議論もあるが、余程手書きに自信が無い限りワープロを使うのが無難であると思った方が良いだらう。画一的なワープロの文字を延々と読まされ続けている時、優雅な手書きの文字を眼にした審査員はきっと好印象を得るだろうが、あまり自信過剰にならぬ方が良かろう。

(6) 論文リストをゼロにする

業績がゼロであると、いくら立派そうな目的、計画が書かれていてもどうしても説得力に欠ける。要するに、信じろと言う方に無理がある。「あなたに、それができるという証左が欲しいですね」と問われたときの答えがこの論文リストであると思うのが良いようである。

以上の6点が典型的な採択されないポイントである。こう書き並べると、どれも当たり前のようであるが、これらをクリアしていない、つまりこの6点のどれかに引っかかっている書類が驚くほど多いようである。そして、当たり前だからこそ、採択されないポイントなのである。

では、何故に上のようないい加減な文章がそう多く見られるのか。どうやら、何を書くべきかを間違っていて認識しているらしい。だから、上の(1)~(6)どれかに引っかかった人は、心を改めるという作業から開始しなければならない。

2. なんとか採択されたい

まず科研費とはどのような性格のものであるか復習すると、科研費は、個々の研究計画を助成するための仕組みであって、予算を一定の公式や慣例に従って分配す

るための方便ではない。申請者がそれまでいかに立派な研究をしていたとしても、計画の内容が貧弱であれば助成の対象にならないということである。最近の言葉では「競争的研究資金」という述べ方もある。

以上を反省して、何を書くべきであったか、それを述べよう。

問題の多いの部分から行く。「研究計画欄」である。この欄に関しては殆どの多くの人が何を書くのか取り違えている。答えから言えば、此の欄は、経費を幾らどのように使うのかを具体的に書く欄なのである。決して、目標とする定理を証明するためには、どのような補題を示した後に、こういう命題を示して、と言った、数学的な「計画」を書く欄では無い。何をするために幾らどのように何時使うかを書かねばならないのである。具体的には、「 $\circ\times$ の計算をするにはどのような計算機を導入して、 $\circ\times$ を処理するソフトウェアを走らせる必要があり、それに関する予算が合計何百万円かかる」とか、「 $\circ\circ$ 大学の $\circ\circ$ 氏と $\times\times$ 理論についての研究連絡を年に N 回するから合計何十万かかる」とか等々。更に、昨年からは多くの人の努力が実り外国旅費が使用できるようになったが、外国旅費については特に詳しい計画を書くべきである。その際、国内で遂行出来ることをわざわざ国外で行う計画を立てたり、ましてや本当にそれを実行してしまうことは犯罪的行為である。これでは、折角の多くの努力が報われない。この点に充分意を払うべきである。

また、数学特有の事情、もっといえば余所の分科から見て異様に映る事として、経費の内訳で旅費の占める割合が非常に高いという点があることにも留意すべきである。我々数学者同士では当たり前の事で、その理由など改めて説明することもないような事であるが、一步離れればそれは相当異常視されているのである。これらの人々を納得させるためにも、特に旅費の申請には注意を払って、計画を立案すべきである。

以上のことが判れば、しばしば耳にする「何で、計画・方法なんて事を申請時に書かねばならないのか。書けるものか。そんなことが判っていれば苦勞しません（とくに定理が出来ている）」という不平不満が全く的外れたものであることが良く判るであろう。

次は目的欄。ここは「具体的に何を何処まで明らかにしようというのか」を書く欄であるが、飽くまでも具体的にである。この辺の匙加減は難しい部分であるが、まず一つの判断基準は「自分しか書けないことを書く」ということではないだろうか。この場合、「何を研究するのか」の部分と「何処まで（どういう風に）」の部分の両方ともに「自分にしか書けないこと」を書くのが肝要である。その為には、それなりの細かなキーワードが登場することになるが、一方であまり細かすぎるのも良くない。審査員にはそのキーワードに近い分野の専門家であることもあれば、そうでないこともあるからである。

少し道は逸れるが丁度良い機会なので、ここで、科研費の審査過程をざっと復習しておこう。こういう事をしっかり押さえているだけで、避けることの出来る落とし穴が幾つもあるからだ。

まず、12月初旬に各大学から文部省にまとめて申請書類が届けられる。それを適当に分配して2月に一段審査委員に配布される。そこで、ひとつの書類に対して3人（乃至6人）の審査委員が眼を通すことになる。そして、3人それぞれが与え

た得点を合算し、それを基にして申請者の序列化が行われる。さらに4月、その結果を踏まえて2段審査員がその序列に磨きをかける（広い立場から総合的な調整を行う）。だから、申請者は、基本的には一段審査の合計点を如何に確実に稼ぎ出すかが主眼になる。ここで、申請者1人の書類に対して3人の一段審査員の眼が通ると言うことを忘れないで欲しい。3人の審査委員がいると言うことは、1人位は申請者の専門分野に近い人が混じっているかもしれないが、残り2人は細かいことを書いても判らない人であろうと考えられるし、逆に1人位は細かいことを書かないと中味が無いとネガティブな評価を下す可能性が高いとも言える。このことをじっくり考えながら文章作成に挑まねばならないのである。

また、この書類審査は「総合点」「研究」「計画」の3つに関してそれぞれ5段階評価を受ける。その際、

- (1) 特色ある研究であること、
- (2) 研究目的は、焦点の絞られた具体的なものであること、
- (3) 独創的な研究内容を持っていること、
- (4) 研究の進め方が着実で、研究経費の算出が合理的であること、

が配分基本方針として明文化されていることに注意すべきである。これも、漫然と眺めてみれば至極当たり前のことばかりであるが、先述の悪い例を思い起こせば、一般論を聞いてなるほどと思った事でも、いざ実行に移すととなると難しい事であるということが了解できるだろう。

さて、審査内容をさらに細かく見てみると、「研究内容」については、

- (1) 研究目的の明確さ：研究目的は広い領域を包括するような漠然としたものではなく、具体的な目標が明確に設定されているか、
- (2) 独創性、
- (3) 当該学問分野及び関連学問分野への貢献度、

がチェック項目であるし、「計画」については

- (1) 計画の妥当性：計画が充分練られ、その進め方が着実なものになっていて、目的を達成するために適切であるか。研究者が複数の場合、それぞれの役割分担が目的の解決に集中されているか、
- (2) 研究遂行能力：研究業績等に鑑み、その研究を遂行し、所期の成果を挙げると期待できるか、

が、チェックポイントである。過去に書いた書類がこれらを何処まで満足させるものになっていたか、素直に反省してみる機会があっても良いと思う。

3. 最後に

ここまで読んでその気になってきた人は、「科研費計画調書は事務書類である」という、これまた至極当然な言葉を考えてみられたい。この言葉に凝縮された意味を十分に汲み取る事が出来たら初級編は卒業だ。

一つだけ書いておくと、当たり前なことちゃんと書く、書かなければ伝わらない、ということのを改めて認識して欲しい。審査委員は申請者の都合に合わせて解釈してくれることは一切無いと思うべきである。例え審査委員が申請者の意を想像することが出来たとしても、明文化されていない事柄を理由に高い評点を付ける事は

無い。もしも実行して、余所から不正と言われても返す言葉がないからである。

次は中級編。ここで、改めて「公募要項をよく読むこと」を奨める。初級編を修了していたら、それまで何気無く読み飛ばしていた箇所の中に、重大な文言が散らばっていたことを認識することが出来るだろう。そもそも、今まで述べて来たことすべてが公募要項に書かれていると言っても過言ではない。

そして、科研費計画調書は研究費補助の申請なのであるから、お金のことを明確に書かねばならないことは何度強調してもし過ぎることは無かろう。どうも、かなりの人が「お金の事を前面に出して書くのはみっともない」とか「恥ずかしい」とか、はたまた「数学者のやることではない」という意識下で書類を書き進めているように見受けられる。しかし、我々がやろうとしているのは飽くまでも、自分の研究計画を遂行する為に必要な「お金の補助を願い出る行為」なのであって、それ以上でもそれ以下でもない。お金の補助を願い出る以上、お金の事を主体にして書くのは当たり前である。それ無しで補助金を得ようとするのは、虫が良過ぎる。その様なことが認識されていれば、間違っても、使用内訳が100万円単位でポンポンと振り分けてあるだけとか、次の頁に「ワークステーション1式 200万」と書いて済ますようなことは無くなるであろう。

ここまで来れば、あとは各自の試行錯誤を積み重ねるしかない段階に入ったと考えてよい。

その際の効果的な方法を一つ述べる。それは、同僚同士で書類の相互批評をすることである。自分と同じ専門である必要が無いどころか、むしろ非専門家位の方が良いのは今までの記述で明かだろう。「これどういう意味?」とか「僕にでも判り過ぎるから、もっと詳しい記述の方が望ましいのでは?」などとワイワイやるのも楽しいものである。

いずれにしても、「文章作成には一週間位の時間を費やすべきである」(これだけに専念して一週間という意味ではない)ことを述べて本論を終えたい。

最後に、採択を目指すなら読むべきものとして、次の文献を紹介しておく。

「科学研究費の基礎知識」飯田益雄著(科学新聞社発行)。これは大学の生協などでみかける入門書。

「週間・科学新聞」(科学新聞社発行)。本年度の数学の採択者一覧は5月23日付紙上、30日付紙上の2回に分けて掲載されている。此の新聞を良く読んでいるのとそうでないのとは世の動きの見え方がかなり違うであろう。というような、相当量の情報が掲載されている。

「文部省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧」(ぎょうせい発行)。配分の結果の集計表、採択者の研究課題等、および審査員の名簿がここで公開されている。申請者必携の書。必要があればすぐに手に取れるよう、教室に一冊は常備したい。学部の事務室または中央事務室に眠らせているようではいけない。

「学術月報」(日本学術振興会発行)。これは科研費に限らず、とんでもない情報が(良く読めば)満載されている本。しかし、これは高段位者向け。

では、Good luck!

(みまち かつひさ、九州大学大学院数理学研究科)